

機関番号：32409  
 研究種目：研究活動スタート支援  
 研究期間：2009～2010  
 課題番号：21830099  
 研究課題名（和文）社会不安障害に対する PEP を考慮した認知行動的介入法の効果検討  
 研究課題名（英文）The Effectiveness of Behavior Cognitive Intervention in consideration of PEP on Social Anxiety Disorder  
 研究代表者：五十嵐 友里（IGARASHI YURI）  
 埼玉医科大学・医学部・助教  
 研究者番号：00551110

## 研究成果の概要（和文）：

本研究は、社会不安者において活性化されやすい社会的場面の回顧的处理で、不安感情やネガティブな自己知覚が顕著である post-event processing（PEP）に焦点を当てた。社会不安の維持において PEP、反すう、心配といった認知的処理がどのようなメカニズムで社会不安に影響を与えるのかについて検討した。また、社会不安障害患者を対象として、ビデオフィードバックを用いた PEP に対する介入を行い、その効果を検討した。

## 研究成果の概要（英文）：

This study focused on post-event processing (PEP) which is retrospective process and easy to be activated in a social anxious. It was investigated how PEP, rumination and worry influence maintenance of the social anxiety. Furthermore social anxiety disorders were participated intervention for PEP using the video feedback. And effectiveness was discussed.

## 交付決定額

（金額単位：円）

|         | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|---------|-----------|---------|-----------|
| 2009 年度 | 1,070,000 | 321,000 | 1,391,000 |
| 2010 年度 | 960,000   | 288,000 | 1,248,000 |
| 総計      | 2,030,000 | 609,000 | 2,639,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：臨床心理学

キーワード：社会不安障害，post-event processing

## 1. 研究開始当初の背景

社会不安障害の治療には、認知行動療法が有効であると報告されている。しかしながら、認知行動療法の施行によって症状が改善する患者の割合は 40～60%と報告され、Clark et al. (2003) は未だ改善の余地があると示唆している。すなわち、認知行動療法による社会不安障害の治療には未だ修正の必要がある。

Clark & Wells (1995) は社会不安障害の認知モデルを検討し、情報処理のバイアスが社会不安の維持要因として機能することを

示唆している。このモデルの中には、聴衆に観察されている対象として自分を処理する注意のシフトが起きる（注意バイアス）、社会的場面を脅威刺激として知覚する（解釈バイアス）、といった情報処理バイアスが位置づけられている。また、社会不安場面において自動的に活性化されるこの“不安プログラム”の他に、社会的場面を終えた後の事後の認知的処理として PEP が位置づけられている。

## 2. 研究の目的

本研究では大きく以下の4点について検討した。

### (1) PEPの活性化レベルと社会不安傾向の関係

先行研究における社会不安のPEPに関する検討は、多くがアナログ研究であり、臨床群によるデータは少ない。健常者と社会不安障害患者の両者を対象としてPEP活性化の差異を検討することを目的とした。

### (2) 事後の認知的処理が社会不安に与える影響

出来事の事後の認知的処理としては、PEP以外に反すうや心配が挙げられる。これら3つの認知的処理は高い類似性が推察されることが問題点として挙げられる。社会不安の維持において、PEP、反すう、心配といった事後の認知的処理がどのようなメカニズムで社会不安に影響を与えるのかを明らかにすることを目的とした。

### (3) 社会不安障害に対して用いられる従来の認知行動的介入に対するPEPの反応性

これまでに用いられてきた認知行動的介入はPEPに対してどのような影響を持つのかについて検討することを目的とした。

### (4) PEPの操作介入が社会不安症状に与える影響の検討

研究者のこれまでの研究でPEPの思考様式を検討したところ、反すうや心配と比較してイメージで経験されやすく、さらに、そのイメージは観察者視点のイメージとして経験される傾向が強いことが示された。したがって、社会的場面で形成される自己イメージがPEP活性化時に想起されるイメージに影響を与え、反すう、心配、社会不安に影響を与えることが予測された。そこで、社会不安障害においても現実的な自己イメージの知覚によってPEPの操作が可能であり、社会不安症状、心配、反すうに与える影響を検討することを目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1) PEPの活性化レベルと社会不安傾向の関係

調査対象：調査 ... 4年制大学、短期大学に在籍する611名(男性243名、女性368名、平均年齢 $19.70 \pm 2.31$ 歳)を対象に調査を行った。

調査 ... 医師のDSM-TR(APA,2000)の診断基準による診断を受けた社会不安障害患者17名。関東近郊の総合病院精神

科に外来通院しており、全員医師による処方を受けていた。処方の内容は、抗不安薬、抗うつ薬が主であり、睡眠導入剤が3名、抗てんかん薬が2名に処方されていた。

調査材料：Rachman et al. (2000)によるPost-event processing Questionnaire (PEPQ)を日本語訳したもの。翻訳に際しては原著者から許諾を得た。日本語訳は、筆者が作成したものを臨床経験の豊富な臨床心理士1名と英語に熟達した臨床心理士1名が評価し、より適切なものに修正した。そして、その日本語訳について、英語を母国語とし、日本語に堪能な英語担当教師によってバックトランスレーションが行われ、適切な日本語であることが確認された。

手続き：

調査 ... 教場において集団で実施された。

調査 ... 主治医より書面を用いて十分な説明を行い、書面にて協力の同意を得た。

### (2) 事後の認知的処理が社会不安に与える影響

調査対象：4年制大学および専門学校に通う313名(男性106名、女性205名、性別不明2名、平均年齢 $20.46 \pm 3.16$ 歳)

調査材料：

PEPQ 日本語版：PEP測定

日本語版反応スタイル尺度(名倉・橋本, 1999: Response Style Questionnaire): 反すうの測定には日本語版反応スタイル尺度(RSQ)の否定的考え込み下位尺度を用いた。

Penn State Worry Questionnaire 日本語版(杉浦・丹野, 2000: PSWQ): 心配測定

Liebowitz social anxiety scale 日本語版(朝倉ら, 2002: LSAS): 社会不安測定

手続き：教場において集団で実施された。

### (3) 社会不安障害に対して用いられる従来の認知行動的介入に対するPEPの反応性

調査対象：社会不安障害に対するCBGTを受けた社会不安障害患者6名。

調査材料：Post-event processing Questionnaire

日本語版(PEPQ): PEP測定

手続き：社会不安障害のための集団認知行動療法の前後でPEPの測定を行った。

### (4) PEPの操作介入が社会不安症状に与える影響の検討

調査対象：DSM-TR(APA, 2000)の診断基準を満たす社会不安障害患者1名。関東近郊の総合病院メンタルクリニックに外来通院しており、X-1年11月~X年1月に社会不安障害のための集団認知行動療法を受けている。患者には、研究の概要、目的、方法、研究協力の任意性と撤回の自由、研究参加による利益と不利

益，個人情報保護について書面と口頭で十分に説明し，書面にて協力の同意を得た。なお，対象者への介入はX年9月に行われた。

調査材料：

PEPQ 日本語版：PEP 測定  
 PEPQ 日本語版エクスポージャー場面用 (PEPQEx)：セッション内で行ったエクスポージャー場面に対する PEP を測定するため，PEPQ を改編したもの。  
 日本語版反応スタイル尺度の「否定的考えこみ」下位尺度 (名倉・橋本，1999)：反すう測定。  
 PSWQ 日本語版 (杉浦・丹野，2000)：心配測定。  
 Short Fear of Negative Evaluation Scale (笹川ら，2004：SFNE)：他者評価懸念測定  
 LSAS 日本語版 (朝倉ら，2002)：社会不安の程度と社会的場面の回避を測定。  
 パフォーマンス評価用紙：エクスポージャーでのパフォーマンスを評価するために用いた。得点が高いほど，ネガティブなパフォーマンスが自分にあてはまると回答していることを示す  
 出来事の聴取：2週間後の測定の際に用いた。セッション終了後から測定日までの間に，強い不安を感じた社会的場面があったかどうかを尋ねた。

手続き：患者1名を対象に1週間の間隔をあけて計3回のセッションを行った。セッションの内容を表1に示す。

表1 介入セッションの概要

| 回数  | 主な内容  |
|-----|---|
| 1回目 | 集団認知行動療法の復習，エクスポージャー（ビデオ撮影）                 |
| 2回目 | ビデオフィードバック，PEPについての心理教育，エクスポージャーとビデオフィードバック |
| 3回目 | エクスポージャーとビデオフィードバック，まとめ                     |

ビデオフィードバック：ビデオフィードバック (VF) は Harvey et al. (2000) および，Hofmann & Otto (2008) にしたがって行った。ビデオを見る前に，患者はビデオで見るだろう自分を想像してパフォーマンス評価用紙に回答を求められた。その後，ビデオに映っている様子を2分間，さらに詳しく想像するよう教示され，眼をつぶってどのくらいうまく振る舞えたかについて考えながら自分自身の様子を想像した。引き続いてビデオを見る際には，以下の3点に留意するよう教示した。ビデオに映っている人は，「自分ではなく，第三者である」と思って見ること（まるで知らない人を見るかのように）。ビデオに映って

いる人は第三者だと思って，客観的に見る。どのように感じるかではなく，どのように見えるかに注意を払ってみること。そして，ビデオ視聴後に，患者は再度パフォーマンス評価用紙にもとづく評価を求められた。

#### 4. 研究成果

(1) PEPの活性化レベルと社会不安傾向の関係  
 学生群と社会不安障害群における平均点の比較検討を行った。社会不安障害患者の平均年齢は30.94歳，学生の平均年齢は19.64歳で，年齢差が見られたことから ( $t[438] = -19.97, p < .01$ )，年齢を共変量とした共分散分析を行った。その結果，学生群よりも社会不安障害群の得点が有意に高いことが認められた ( $F[1, 437] = 4.10, p < .05$ )。この結果から，PEPの活性化レベルは社会不安障害患者と大学生を弁別することが可能であることが示唆された (学生群平均 =  $484.60 \pm 193.96$ ，臨床群平均 =  $599.41 \pm 193.99$ )。

(2) 事後の認知的処理が社会不安に与える影響  
 PEP，反すう，心配が社会不安に与える影響について検討を行った。分析には Amos16.0 を用い，母数の推定は最尤推定法により実施した。PEP，反すう，心配間には相互の矢印，それぞれの認知的処理から社会不安への矢印を描き，探索的モデル特定化分析を行った。その結果，採用された最終的なモデルを図1に示す。PEPが事後の認知的処理の契機となり，PEPが反すう，心配へと影響を与え，さらに，反すうと心配が社会不安に影響を与えている可能性が示された。

PEPは，比較的心配よりも反すうに影響を強く与え，反すうが心配へ影響を与えるという処理の流れの影響が強い傾向が認められた。

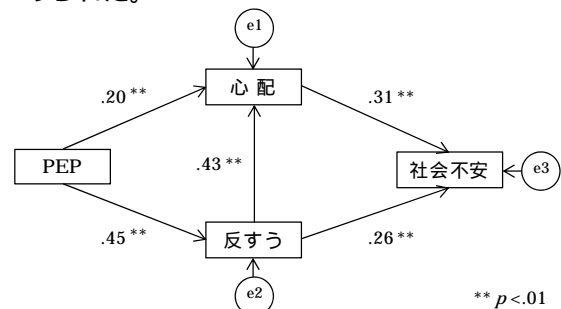


図1 社会不安への事後の認知的処理プロセス

(3) 社会不安障害に対して用いられる従来の認知行動的介入に対する PEP の反応性  
 PEPQ 得点を従属変数とし，時期を要因とした t 検定を行ったが，有意な変化は認

められなかった ( $t[1,4]=0.275, p=.80$ )。したがって、従来用いられる社会不安障害に対する認知行動的介入法は PEP の活性化に対する効果を持っていない可能性が強いことが示された。

#### (4) PEP の操作介入が社会不安症状に与える影響の検討

第一に、パフォーマンス評定得点の変化は、非常に興味深い結果を示した。患者は1回目のエクスポージャーで VF をせずにセッションを終了し、セッション2を迎えた。セッション2の冒頭で回答を求められたパフォーマンス評定は、セッション1の最後に回答したパフォーマンス評定よりもネガティブに変化していたことが分かった。また、同様にセッション2冒頭で測定された PEPQEx も高い値を示していた。これらのことから、患者はセッション1の後、実施したエクスポージャーについての PEP を活性化させ、自らの自己イメージをネガティブに歪めていたと考えることができる。各測度の得点変化と評価を表2にまとめた。

これは、本研究と同様に SPQ を用いて、PEP は活性化されることでネガティブな自己評価が維持されることを示した Abbot & Rapee (2004) の知見等において認められた PEP が解釈に与えるネガティブな機能と一致している。

セッション2で実施されたエクスポージャーの VF 後の評定では、さらに評定得点を増大させ、よりネガティブに評定していたことが示された。本来であれば、VF 後は自らを客観的に見ることによって評定得点が減少することがねらわれる。この評定得点についても、PEP の活性化による自己イメージの歪みが関連していると考えられる。患者は前のエクスポージャーから1週間の間、他者から見えるパフォーマンスについて、自ら作り上げた自己イメージに基づいて処理を行っていたと考えられる。そして、ビデオを見せられた時にさらに評定得点を高めた原因として、自分が気にしていたことにより注意を配分してしまった可能性が考えられる。

PEP、心配、反すうは時間とともに漸減した。反すうは介入前から低い程度であったため著しい効果は認められなかったものの、PEP においては、日常生活に対する得点もエクスポージャー場面に対する得点も中程度から低い程度に大きく減少している。心配においても、高程度から中程度まで得点が減少し、PEP の変化に時間的に後続して減少したと考えられる。このことから、現実的な自己イメージの知覚による PEP の操作が、心配の減少に影響を与

えた可能性が考えられ、本研究で示された因果モデルと一致していた。

また、SAD 症状については、増減を繰り返しながら全体的に見ると回避傾向において減少が認められた。PEP から、心配の認知的変数の漸減に伴って回避傾向が減少したと考えられる。社会不安傾向については、全体的に見ると減少は認められなかった。特にセッション3から終了2週間後の間に得点の増加が見られた。この得点の増加は、この2週間間に患者が経験した社会的状況によるものと考えられる。患者はこれまで他者との関わりがほとんど必要ない勤務状況であったが、この2週間間にグループ内でのプレゼンを経験したと報告した。しかしながら、回避傾向が減少したことから、今後も社会的場面を回避せずに経験することで今後社会不安傾向も減少していく可能性があると考えられる。

表2 測度得点の変化

Table 6-2-3 尺度得点の変化

|                    | セッション1前 | セッション2前 | セッション3前 | セッション3後 | 2週間後  | 効果 |
|--------------------|---------|---------|---------|---------|-------|----|
| PEP                | 330 中   | 300 中   | - -     | - -     | 120 低 |    |
| PEP (Exposureに対する) | - -     | 310 中   | 80 低    | - -     | - -   |    |
| 心配                 | 68 高    | - -     | - -     | 64 高    | 53 中  |    |
| 反すう                | 36 低    | - -     | - -     | 32 低    | 28 低  |    |
| 他者評価懸念             | 46 中    | 45 中    | - -     | 35 低    | 40 低  |    |
| 社会不安               | 31 中    | 41 高    | - -     | 21 低    | 32 中  |    |
| 社会的状況の回避           | 23 高    | 26 高    | - -     | 12 低    | 17 中  |    |

Note: 数値は尺度得点。高・中・低はその評価を示す。それぞれの得点は、下記に示した基準における平均値とSDを用いて評価された。平均値から±0.5SDの範囲を中、それ以上を高、それ以下を低とした。  
PEP: 第4章研究3におけるデータによる・学生群データ  
PEPEx: 第6章研究8による・学生群データ  
心配: 杉浦・丹野(2000)・学生群データ  
反すう: 第4章研究3におけるデータによる・学生群データ  
他者評価懸念: 陳(2005)・臨床群データ  
社会不安, 社会的回避: 朝倉ら(2002)・臨床群データ

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計2件)

五十嵐友里 post-event processing の思考様式における特徴 日本行動療法学会第35会大会 2009.11.14. 千葉.

Yuri Igarashi Differences and similarities between post-event processing, rumination and worry in a non-clinical population. World Congress of Behavioral and Cognitive Therapies, 2010.06.04., Boston, USA.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

五十嵐 友里 (IGARASHI YURI)

埼玉医科大学・医学部・助教

研究者番号: 00551110